

巻頭言 二神氏学習交流会イン小才角に参加して

副会長 二神俊一

シリーズ

二神氏ゆかりの地を訪ねて 第6回

小才角二神氏

事務局長 二神英臣

小才角二神氏のルーツ

理事 二神亮郎

二神古文書解説 第5回

事務局長 二神英臣

系譜家紋紹介 第5回

二神氏と苗字の歴史 第5回

二神氏人物伝 二神熊蔵(武好)

理事 二神政幸

小才角二神の先祖を求めて

理事 二神栄三

「ふたがみ」にまつわる話

二神(にかみ)氏について(その2)

会長 二神浩三

むかしばなし「二神島と菅原道真」(その3)

理事 豊田渉

むかしばなし「魚屋七兵衛の話」(その4)

会員さんからの便り

一つの人生訓

愛知県

二神弘

ルーツ

神奈川県

二神和子

二神島を訪ねて

青森県

二神利絵

役員のつぶやき

フーガの戯れ

常任理事

二神重則

巻頭言

二神氏学習交流会イン小才角に参加して

副会長 二神俊一

先日、二神浩三会長から「海の民ふたがみ 第6号」の巻頭言を書いて欲しい旨の電話を受け、戸惑いながらも、急ぎよ、昨年11月に時計を戻しながら筆をしたためています。

平成14年11月初旬、四国の霊峰石鎚山にも初雪の便りが届いた頃、高知県大月町で開催される標記の学習交流会の件で打ち合わせをしようと浩三会長へ、「私が運転する車でご一緒しませんか」と言うつもりで電話をしました。奥様から、予想外に「入院している」旨のご返事があり、びっくりして、松山市民病院へ飛んでいき面会したところ、幸い、浩三会長の同級生である宮田院長が同病院の理事長でもあり、即、適切な対応がなされていました。しばらく入院を余儀なくされましたが、約3週間で無事退院できました。

これまで、すべて、浩三会長に「おんぶに抱っこ」していたことを反省しつつ、正に会則の「会長に事故ある時は云々」に該当し、会長の職務を代行する羽目となりました。

前夜祭もあり、一泊するため、先ず、高齢の母親（92歳）をいつもデイ・サービスでお世話になっている「ていれぎ荘」へショートステイを依頼し、連れて行ってから、ワイフと車で出発。途中は初雪が路面側に残っていましたが、長女の勤務先である津島高校へ寄ったりしながら、目的地の大月町営「ベルリーフ大月」へ。私たちにとっては初めての大月町訪問でしたが、立派な建物には驚きました。小才角の名前は、以前から奈良市在住の二神栄三さんや宿毛市在住の二神政幸さんからよくお聞きしていました。（珍しい名前であり、その由来をお聞きしておけば良かったと思っています。）

前夜祭は会員のほか、地元小才角の二神氏一族が沢山集まり、地元の二神氏宗家13代目の二神明義氏の歓迎の挨拶の後、乾杯で宴会が始まりました。自己紹介などもあり、ご馳走の皿鉢料理に舌鼓を打ちながら和やかに行われました。土佐の美味しいお酒が入り、盛り上がりを見せた宴会はそのまま、宿泊用の部屋へ会場を移してからも更にボルテージは上がり、特に二神敬之助氏の隠し芸は素晴らしく、笑い転げるほどの盛況でした。

翌11月10日は快晴。二神明義氏の大邸宅に約50名の二神氏関係者が集まり「二神氏学習交流会イン小才角」が開催されました。小才角二神氏は太閤検地頃の「二神九郎(良)衛門」を祖とし、2代目八佐衛門、3代目喜平次と系譜を発展させてきました。寶永4年(1707)にこの地方を襲った大津波(俗に「亥の大変」)で先祖書きが流失し、小才角に住み着いた経緯が判らないまま400年以上が経過していました。

昭和30年8月に、6代目金助の分家、3男重蔵の系譜に繋がる故・二神栄氏(名古屋市在住の二神亮郎理事の父君)が長年掛けて編集した「二神一族家系図」が完成し、小才角二神一族の関係者に配布され、これが今日まで伝わってきています。

学習交流会は定刻に二神重則常任理事の司会で始められ、幣職が会長代行で挨拶の後、小才角二神氏を代表して二神政幸理事が歓迎の挨拶を述べられました。基調講演で、講師の宅見通雄氏(大月町文化財調査委員、大月町史編集委員)から、小才角二神氏の出自についての一考察」と題して約1時間講演がなされました。

講演後、宗家13代目の二神明義氏が先祖伝来の紙で作られた袴・袴の公開と説明があり、明義氏自身が着用してお披露目をし、会場の注目を集めました。最後に、二神系譜研究会から二神英臣事務局長から報告と連絡事項の説明を行い学習会を終えました。

その後、「小才角二神氏関係史跡訪問」が行われ、菩提寺の曹洞宗地藏寺や墓地遺跡などを訪問しました。墓地遺跡では、「二神元祖墓」「二神之墓」など、二神と刻まれた墓石が想像以上にたくさんあり驚かされました。

再び、明義氏方へ戻り、昼食交流会が和やかな雰囲気の中で行われ、お弁当を美味しくいただきました。その時に話題に上ったお土産の「スルメの一夜干し」を二神商店で買い求める会員の方が多く見られました。午後2時、全行程を終え「ベルリーフ大月」の駐車場までバスで移動。小才角二神氏の方々と手を振っての見送りを受けながら大月町を後にしました。

今回、「二神氏学習交流会イン小才角」が滞り無くスムーズに出来、数多くの収穫がありました。これもひとえに地元の皆様のご支援・ご協力の賜であり、特に交流会の場所をご提供いただきました二神明義氏のご協力に対しまして厚くお礼を申し上げます。また、遠路はるばる参加していただきました会員・役員の方のご協力に感謝申し上げます、本稿を終えたいと思います。

小才角二神氏

事務局長 二神英臣

高知県幡多郡大月町小才角



小才角二神氏の初代九良衛門が伊予国からやってきて初めて住み着いたところとして知られています。長宗我部検地帳は「小佐井津野村浜タノ上、下屋敷」と云う所に九良衛門が住んでいたことを伝えています。浜タノ上、下屋敷の場所は現在では海中に沈んでしまったものと見られます。宝永4年の土佐沖大地震による大津波のため村全体が海没してしまいました。山の高さまで及んだ大津波のため小才角二神氏の屋敷は勿論、

先祖書き、墓地、地蔵寺の過去帳まで流失してしまいました。

現在の高知県幡多郡大月町小才角は藩政時代には、小佐井津野村(元禄地払帳)と呼ばれており、小才角と呼ばれ始めたのは明治に入ってからでした。(南路志・明治3年郷村高帳)

九良衛門が住み着いた天正18年(1590)頃には、屋敷数5、うち居屋敷3で検地面積10町6反とあり、元禄郷帳では小佐井津野村は99石とあります。寛保郷帳では家数56、人数307、馬36、船11、天保年間の浦々諸縮書には市艇1、鰹漁船4、諸漁船8、諸網6、漁業は鰹・小漁、家数39、人数260、職業別では家族その他を含め庄屋18、水主・漁師105、商人43、間入91、医師2、座頭1と記録されています。

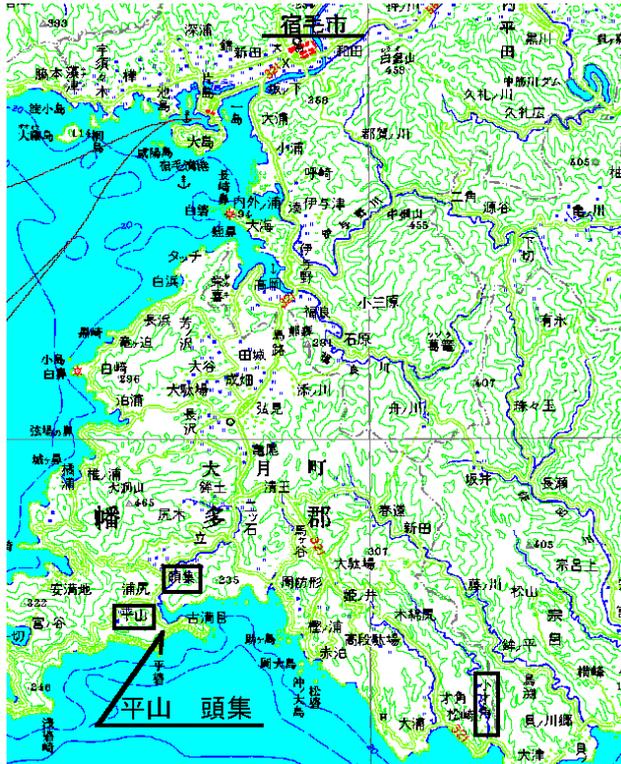
小才角村も明治、大正、昭和前半までは大きな変化はありませんでしたが、昭和32年になり、これまでの月灘村と大内町が合併し大月町となりました。いわゆる昭和の大合併です。そして、現在の高知県幡多郡大月町小才角は町の東外れが土佐清水市で、切り立った断崖が美しい観光地の大堂海岸や足摺岬にも近く、釣りのメッカとしても知られています。また小才角二神氏の宗家、二神明義商店に代表されるスルメの一日干(ひいといぼし)は小才角を代表する風景として知られ、これを購入する人々が列を切らしません。



明義氏

高知県大月町鉾土

宿毛から約16キロ、国道321号線に入り大月町役場を越えて暫く行くと、二ツ石の信号に出て右に折れる道があります。この道が県道43号線、いわゆる柏島～二ツ石線で、鉾土はその最初の部落にあります。右に鉾土集会所を、左に町立二ツ石保育園と特別養護老人ホームを見ながら海岸方向に下ってゆくと頭集の部落に入ってきます。



高知県大月町頭集

小才角二神氏6代目金助が幡多郡の頭集、鉾土、平山三か村の庄屋として出向いたのは天明8年(1788)2月16日のことで、小才角から初め

て村外に出向いた最初の人物となりました。

庄屋屋敷を頭集に置いてその任務に当たりましたが、その後、6代目金助の次男金助がその後を継ぎ、その系譜が代々この地区の庄屋職を勤めました。また、金助は弘化年間に近隣の一切部落の庄屋職を兼務するなどの実績も残しています。

今日この頭集二神氏系譜には、高知県美術協会所属の二神敬之介氏が健在で、いつも絵筆を手放さず多くの素晴らしい作品を残しています。

頭集は、昔から石の産地として知られ、この地から大阪城築城の際に、切り出し献上したと云われる石碑が残っています。現在も花崗岩を切り出して石垣や捨て石などに活用されています。(写真.2)

高知県大月町平山

頭集の部落からさらに海岸まで下った所が平山の部落です。平山から南東方向へ行くと古満目に出ますが、古満目は太平洋戦争末期に本土決戦準備が発令され、昭和20年3月に特攻隊の第22魚雷艇隊が配置。特攻兵器の魚雷艇が進出していたことで知られています。

平山からは現在、一切、柏島方面に抜ける平山トンネルが工事中で、これが完成すると柏島までの所要時間は大幅に短縮されます。



二神氏ゆかりの地を訪ねて

～ 小才角二神のルーツ

理事 名古屋市在住 二神亮郎^{あきひ}



時は戦国時代の末期、天正 13 年 (1585) 7 月秀吉の命を受けた小早川隆景が、河野氏征伐のため伊予に進撃、二神島本家七代(豊田本家系図 2 3 代)二神通範は、風早軍の高穴山城主として良く交戦したが、陥落の悲運にあった。

(通範は戦いの後、31 年生存し元和 2 年(1616) 7 月 15 日没す。法名＝樹枝通種居士、墓は北条市の片山墓地にある。)

同時に雄甲城城主・雌甲城城主にあった、二神一族は敗亡した。

9 月、河野通直は温泉郡、伊予郡、浮穴郡の兵を湯築城に集めて、抗戦を試みたが、大勢を察知し降伏した。秀吉は河野氏の所領を没収し、隆景が伊予 35 万石の大名になり伊予の国は完全に秀吉の統一政権に握られた。

敗亡した二神一族は風早(北条)・土井・片山・城辺・小才角・道後その他多方面に広がり帰農したと推測される。

初代・九良衛門

それから 5 年の時を経て、その後身を潜めていた小才角二神 (栄の家

系図筆頭) 初代九良衛門の名が公文書に現れたのは、天正 18 年 (1590) 3 月 2 日、長宗我部天正地検帳に「小才角浜タノ上、小島民部太夫ノトコロ九良衛門居ル」と歴史上初めて登場する。天正地検帳に寄ると、当時の小才角の人口は 4 人、家屋は 8 軒であった。

伊予の国没落の後、どのような経路でここに来たのか、また誰の子であるのか、何歳であるのかは謎である。

先祖書その他は、小才角二神家本家四代金助 31 歳のとき「寶永 4 年 (1707) 亥大變令流失於先祖書故詳不知元祖從豫州來ルト申傳免而已」と、本家の古文書に記載がある。

寶永 4 年 (1707) 亥の大變とは、この年、史上最大の地震だったと言われる宝永地震があり、津波の被害も含め東海・近畿・四国にかけて大被害があった。その際の、大津波、大陥没で小才角二神の先祖書など全てを消失されたとされています。

その 1 ヶ月後には、富士山の大噴火、いわゆる宝永噴火があり、全国各地に深刻な被害があったという。

故に先祖の墓も三代喜平次までは (流失したのか) 存在しない。四代金助【遊山自心信士=1738 年: 天文 4 年 5 月 24 日・62 歳亡】から現存します。(小才角・栄の墓の斜め前下) 四代から九代まで並んでいる。

本家 7 代熊蔵

6 代金助【恭林了圓信士=1789 年: 寛永元年 6 月 23 日・54 歳亡・天明 8 年 (甲年) 帯刀御免の上、三か村庄屋】の子・長男
熊蔵【大道奥関信士=1845 年: 弘化 2 年 6 月 28 日・81 歳亡、安永 7 年 11 月郷士】は 7 代目を相続し、次男重蔵が分家となる。

分家初代・重蔵

分家初代、重蔵【功宗智全信士=1800年：寛政12年3月19日・27歳亡】から、分家5代初太郎【光月院覚道自性居士=1934年：昭和9年11月1日・72歳亡】までの墓石は「子の首墓地（ねのくびぼち）」にある。

「子の首墓地」とは、江戸時代、小才角～才角間の本街道であり高山を尾根伝いに才角まで半里（2キロ）、小才角の入り口に当り、墓地として立地されたのは、仏の心で村を見張る（子孫の繁栄を見守る）意味だと思われる。

名称の由来は部落の北の入り口の意味で「子・（ね）の首」とした。子（ね）とは、東（卯・う）西（酉・とり）南（午・うま）北（子・ね）の北の意味であり、首とは、入り口であり重要な位置であるところからつけた名称である。

分家2代目・幾右重門

幾右衛門【鶴翁量寿信士=1860年：安政7年2月23日・83歳亡】は自分の住み家を「入り船屋敷」と呼ばれている場所に建て屋号を「扇屋」と称した。

この時代は封建制も行きづまり、士農工商制度も末期的様相であった。又、気象不順で飢餓が続いていた。幕藩体制の矛盾と、それを乗り越えようとする努力、やがて新しい方向を見出そうとするこうした空気の中で、多感な青年期を送った扇屋幾右重門は「汝、何のためにそこにありや」の心情と希望に満ちていただろう。

その心意気で「子の首墓地」を造成したと思われる。幾右重門が没して143年を経ている。一番新しい初太郎の墓でも69年になる。毎年の墓

参がなかなか果たせず、久しぶりに行くと木が繁茂し、落ち葉が山積している。その折は大汗をかきながら掃き清めていたが。最近あえて掃除をしたり木を切ったりしなくても良いのではと思う。

ありのままの自然の荒れようが好ましくさえ感じられる。さびさびとした風情が、大きな自然に包まれて溶け込んでいる感があり、流石ご先祖さまの選んだ悠久の地と感じいる。先祖として、あの場所での役目は充分はたしたことであろうし、今後も我々が生きている間あと何年か…

、数年に一度でも参り続ける事が最後の供養になると思う。

私の父・栄

栄【安養院医徳道栄居士=1971年：昭和46年11月18日・67歳亡】は分家6代に当り新墓地を建立した。父の戒名は「安養院医徳道栄居士」とあるが、これは父がまだ往年の頃、小才角地藏寺村上住職から頂戴したと聞いている。私は、二神島を訪れるまで二神島に「安養寺」があることを知らなかった。しかしあまりにも偶然なのか、父は知っていたのだろうか。村上住職は、村上水軍の末裔だと豪語していたので知っていたと思われる。当時は情報が殆どなく、父の調べた範囲では二神島には二神さんは住んでいないという話だった。

臥薪嘗胆

栄は38歳の若さで妻晴子【静光院蓮操照室大姉=1943年：昭和18年3月24日・36歳亡】を病死させた。私は小学1年生(7歳)であった。戦前戦後と想像を絶する苦難と絶望の時代、4人の子を残し、母、晴子も無念の死であったと思うが父、栄も人生の悲哀、無常を1人で噛みし

めたであろう。

昭和 38 年、私が 28 歳の時、栄の還暦祝いとして墓石を私が 10 万円（給料 2 万円時代）後は長姉が出し、子供一同として贈った記憶がある。妻晴子没後、墓地だけは改造、整備されていた。その折、生きている栄と後妻藤子の名は朱文字で刻印、つまり妻二人を入れるという離れ業の墓を作った。

栄の「終の棲家」は、親からの古屋敷の改造で済ませたが、墓所は自分の手作りの自信作と自慢していた。

私も父、栄の他界の年を越えました。多分私どもはこの墓地に骨をうずめることはないでしょう。ただ気がかり事は墓守の事です。この宿題が今の悩みです。

最後になりますが、二神系譜研究会の発足を最も喜んだであろう父「栄」も今年三十三回忌を迎えました。「小才角特集」ができるのも何かの巡り合わせでしょう。栄の作成した系図をこの集に載せて特いただくことで最大の供養になると思います。有難うございました。

平成 15 年 11 月



小才角二神家家紋

事務局長 二神 英臣

「小才角特集」の今回は小才角二神氏に伝わる古文書類等についてどのような種類のものが今日まで伝わってきたのかについて報告をしておきたいと思います。

昨年秋「二神氏学習交流会イン小才角」を現地で開催し、小才角二神氏の出自を中心に試論を試みましたが、同系譜に伝わってきた古文書類についてはこれまで紹介されていませんでした。

小才角二神氏には系図、古文書、絵画、屏風、掛け軸、などが伝来していますが、中興の祖と云われる八代目熊蔵の弟で分家重蔵の系譜に繋がる医師二神栄が、昭和27年4月から昭和30年8月まで3年間を掛けて小才角二神氏全体を網羅し完成した「二神一族家系図」表書きによると「宝永四年亥の大変にて先祖書きを失いし為詳なざるも・・・(後略)」と記されてあります。

宝永4年(1707)10月4日午前零時頃に起こった土佐沖を震源地とする大地震のことを「亥の大変」と呼んでいます。この地震の被害地域は五畿七道(京都・大阪・奈良、本州・四国・九州)に及んだと伝えられていますが、それまで小才角二神氏に伝わってきた「先祖書き」がこの地震による大津波のためにすっかり流失してしまったことを「二神一族家系図」表書きが伝えているものです。

当然の事ながら、小才角二神氏の先祖書きだけでなく伝来品や位牌、墓地までもが太平洋に流されてしまったことは想像に難くありません。このため小才角二神氏の宗家を継ぐ当主の二神明義家墓地には大津波に吞まれて沖に流されたことを証明するように三代目喜平次までの墓石は全くありません。四代目金助(元文4年5月24日没)の墓石が最も古い先祖であるかのように最上段の右端に置かれ眠っています。

このように同系譜に伝来するものは全て宝永4年以降のものであり、調査されてはいませんが主として七代目熊蔵の時代のものがその中心をなしているものと見られます。

2003年(平成15)8月27日、理事で宿毛市在住の二神政幸氏(小才角二神氏出)と共に小才角を訪問し、宗家二神明義氏宅に伝わる系図(繫書)、古文書、屏風、襖絵、掛け軸、などを調査しましたのでその結果を中間報告として本欄で紹介しておきます。

小才角二神氏文書

小才角二神氏文書と呼ばれるものはいわゆる系図伝書略記の「二神家繫書(一部)」「二神久万蔵宛書簡」「二神氏母堂米壽詩歌」「老母九十賀筵・下田社中壽歌」などが現存しています。

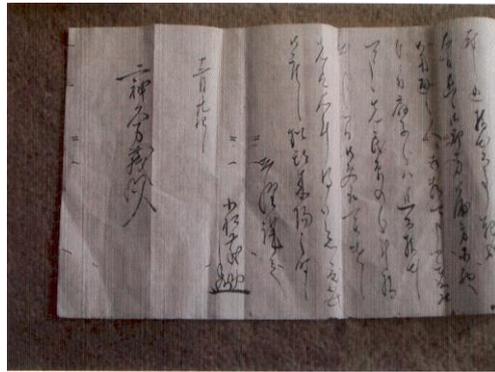
二神家繫書(一部)は五代目金助の略記事項を述べたもので一部が欠損しています。しかし幸いなことに繫書全体は小才角二神氏に残されておりこの文書に本来記載されていたと思われる内容については判明しています。しかし先に述べた「亥の大変」で流出したと云われる先祖書きの内容については不明で、そのことについて「二神家繫書」は初代九良衛門の項に「但寶永四亥大変令流失於先祖書故詳不相知元祖從予州來ルト申傳而已」と記し、小才角二神氏に伝承されてきた内容が書かれてあります。しかし初代九良衛門、二代目八左衛門、三代目喜平次の三名は没年月日も不明で二代目八左衛門を除き戒名も判りません。

約300年前に「亥の大変」の大津波が及ぼした小才角二神氏への大被害は今日に至っても継続されており、今後、起こりうるであろう南海地震など初めとする災害への対応と対策を怠らぬよう現在の子孫の私たちに教えているようにも思えます。

この二神家繫書を現代版に制作編集したのが前述の二神栄で昭和27年から

三年がかりで完成した「二神一族家系図」です。全国の二神氏でこの小才角の「二神一族家系図」のように詳しく記録されたものは今までに見つかっておらず、今後、各系譜が作成する上での参考になるものです。二神栄の長男で二神系譜研究会理事の二神亮郎氏は「父栄が二神一族家系図を作るために診療の合間を見ては愛媛県内の各地へ調査のため赴いていた頃のことをはっきりと覚えています。二神島までは行くことが出来なかったようですが松山までは出かけて行き当時の愛媛大学の先生方や郷土史家とも面会し話を聞いて廻ったようです」と話しています。

二神久万蔵宛書簡は七代目熊蔵が郷土をしていた時代に受け取った書簡で現在2、3通が残されています。二神熊蔵が本来の名前ですが手紙の宛名が久万蔵となっているところから差出人は親しい人物からのものであることも考えられます。内容については解説されておらず今後小才角二神氏文書の全てを調査研究の上では重要な課題となります。



二神氏母堂米壽詩歌は二神熊蔵の母えんの米寿に際して京都の公家、権中納言三条氏や比叡山延暦寺の大僧正から贈られた祝詞や祝い歌を冊子にしたものであると見られます。熊蔵の母えんは大津村の上岡氏から二神金助の元に嫁いできました。金助は53才で世を去りましたがえんは93才まで長生きし天保3年に亡くなりました。二神氏母堂米壽詩歌はえんが88才になった年、文政

11年にお祝いをし、その折りに京都を初め各地の高貴で著名な人物から祝詞や祝い歌を贈られているものです。その内容について詳しい検討はしていませんが祝詞などを贈った人物は十名近くに及びます。今後は祝詞や祝い歌の内容と贈った人物の確定をして行くことが求められています。(写真.1)

老母九十賀筵・下田社中壽歌は二神熊蔵の母えんが九十歳になった年を祝って下田社中からの祝歌を短冊にしてまとめたものです。えんは天保3年7月25日に93歳で没します。法名は「遐等明壽信女」、当時としては驚異的な長寿であったと思われるえんの生涯は近隣の地域の人々からも注目をされる存在であったに違いありません。そのような地域の下田社中の方々から寄せられた祝歌の短冊十七枚が残されています。(写真.2)

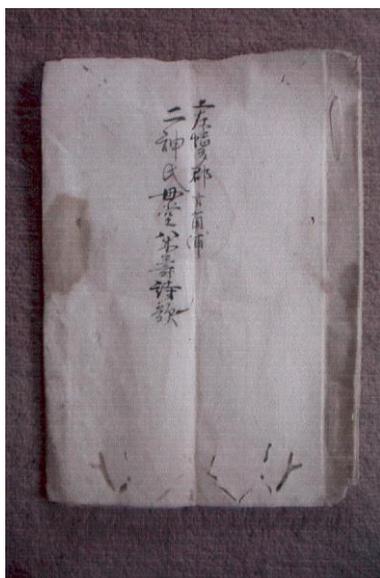


写真.1

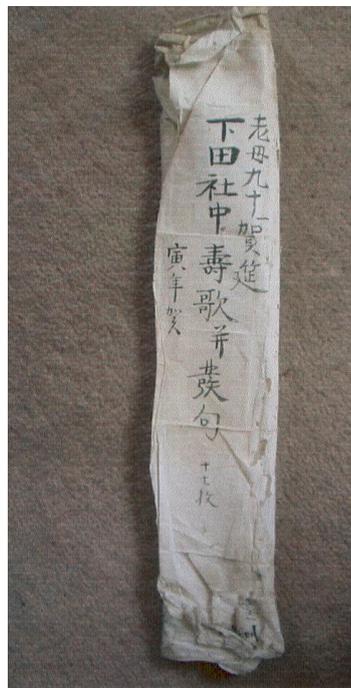


写真.2

小才角二神文書にはこの他数十点の分類未整理のものが存在していますが現段階では内容まで解明されていません。また安永年間に建立されたと伝えられる宗家の旧住宅から持ち出されている後述の屏風や襖の下張り文書の内容などについての調査、解明作業は今後の課題として検討が必要です。

小才角二神氏屏風・襖絵・掛け軸



古文書以外では宗家に伝わっている六曲一双の屏風が一点あります。この屏風には春霞のなか山々に咲く桜花が遠く、近くと屏風全体に描かれ右手前方には松林に囲まれた寺社らしき建物がありその周辺にも桜花が爛漫と咲いている様子を彩色画で描いたものです。小才角二神氏の家伝では「狩野探信の筆によるもの」

と云われていますがこれまでに正式な調査はされていません。狩野探信(1785-1835)は狩野探幽の長男で江戸後期の狩野派の画家で当時名手と称されましたが51歳で没しました。この屏風は二神熊蔵の時代に制作されたものと伝えられており熊蔵が弘化2年に81歳で没していることから逆算すれば生誕は明和年間になり、狩野探信が活躍した時代は、郷土として油の乗り切った時代を熊蔵が駆け抜けていた頃と重なり合います。

大胆な推測を敢えてするならば二神熊蔵の母えんの米寿を祝った文政11年は狩野探信が44歳で、米寿に際して京都の公家や比叡山延暦寺の大僧正などから祝詞や祝い歌を贈らせた熊蔵の実力からすれば狩野探信を小才角へ招待して屏風絵を描かせる事くらいは出来たのではないかと思います。

この屏風絵は現在痛みが激しいため当主の二神明義氏も修復をすることになっています。が同時に探信の筆になるのかどうかについての確認も行うことになります。



次に宗家の旧家座敷にかつてあった襖絵4枚について、表絵は金箔絵で寺と三重の塔が描かれ4枚合わせ絵となっています。裏絵は水墨画でロバに乗った仙人のような人物や山野を行く旅人や童子が表情豊かに描かれています。

古文書類に混じって残されているのが数本の掛け軸類です。掛け軸類には般若心経を大きく墨字で写した物もありますが絵画の数点は以前に関係者から貸し出しの申し出があり貸し出しましたがそれらの中には返却されて

いない物もあるようです。「今回の調査を機会にして調査し、整理したいと考えています」と二神明義氏は語っています。

以上小才角二神氏伝来の古文書類などについて報告をしてきましたが、熊蔵が亡くなって158年が経過し、この時代に残された古文書類も痛みが激しく、本格的な保存作業が、内容の解明とともに必要かつ重要であるとの認識に立って今後取り組んでゆくようにしなければならないと考えます。小才角二神氏文書は土佐国幡多郡の歴史を語るものであり、同系譜や二神氏だけでなく、この地域の歴史を研究する者にとっても必要な史料です。その点において宗家当主の二神明義氏も今後はその立場からの取り組みをすすめる新たな決意に立っておられます。二神系譜研究会としてもその解明のために組織的に取り組む予定にしています。



系譜家紋紹介

NO.5

小才角(こさいつの)二神氏

事務局長 二神英臣

小才角二神氏は現在の高知県幡多郡大月町小才角に住み着いた初代九良衛門から約400年をかけて発展してきた系譜で、同家に伝わる系図伝書略記「二神家繫書」の冒頭に初代二神九良衛門の名前が書かれ「但宝永四亥大變令流失於先祖書故詳不知元祖從豫州來ルト申傳而已」と記されています。このように、同系譜の先祖書きが、宝永4年(1707)10月4日午前零時に発生した土佐沖を震源地とする大地震、いわゆる「亥の大變」で流失したことを述べています。この大地震がどれほどの規模であったのかについては「谷陵記」や「丁亥變記」に詳しく報告されていますが、土佐藩全体での死者は1,844人、流失家屋11,170軒、壊滅家屋4,863軒、破損家屋1,742軒、流失牛馬542匹、亡所浦(亡所とは全滅の意味)63カ所、として幕府に報告しています。小才角は亡所浦として報告されており潮は山の高さまで達したと云われ、生存者がいたのが不思議なくらいの大被害でした。このため、小才角二神氏の初代九良衛門の下屋敷は勿論のこと先祖書きや墓地までが海底に沈んでしまいました。この時代小才角二神氏は四代目金助の時代に入っており31歳の金助は小才角邑老役の任務に就いていました。

現在の小才角二神氏墓地には初代九良衛門から三代目喜平次までの墓石はありません。「亥の大變」の大津波で墓石も含めて村全体が沖に流されたことを物語っています。このため最も古い墓石が四代目金助のもので元文四年五月二十四日歿と記録されています。初代九良衛門、二代目八左衛門、三代目喜平次の三人とも今日まで没年月日が不明で、二代目八左衛門を除き戒名すら判明していません。これは小才角二神氏の菩提寺であった地藏寺も「亥の大變」で流失

した後に衰退し、住職はおろか寺の建物等が無くなり「過去帳」などが継承されて来なかったことに原因があると考えられます。(参考までに小才角村の地藏寺は長宗我部検地帳に記録が残されています)

四代目金助から六代目までは金助の名前を襲名し、小才角邑老役の任務に就いています。この間五代目金助の時、弟の兵吾郎が才角村の紺屋へ養子に入り同家の元祖となりますが後に絶家となります。六代目金助の時代に入って小才角二神氏は発展してゆきます。弟の重吉は分家し貝ノ川門田家より津留を妻として迎えます。この系譜も今日まで続いてきました。

宗家の六代目金助には子供が6人ありましたが、天明8年2月16日惣領の熊蔵に小才角の家督を譲った後、小才角から北西へ10km程の所にある頭集(カヲツトイ)、銚土、平山、三か村の庄屋として赴いて行きました。そしてその後、次男の金助を別家として独立させました。また、三男の重蔵は小才角で分家し系譜を発展させました。後世に「二神一族家系図」を作成した二神栄はこの系譜の出自になります。四男幾右衛門は三男の重蔵が早世したためその後継者となりました。五男の熊右衛門は別家を興しその系譜も今日まで続いています。このようにして小才角二神氏は約410余年間にわたり、目前に太平洋を望む土佐の地で系譜を発展させ、その足跡を着実に子孫に残しながら今日まで継続してきました。

これら小才角二神氏の歴史の中でその発展のために尽くしたと思われる人物は、初代九良衛門の他に「亥の大変」の困難を乗り越えた四代目金助。頭集(カヲツトイ)、銚土、平山、三か村の庄屋として自ら赴き、小才角から外に系譜を発展させる基礎を構築した六代目金助。中興の祖と云われる宗家七代目の熊蔵。それに分家・重蔵系譜で昭和27年より三年の歳月を掛けて「二神一族家系図」を作成した栄、あたりに絞られるのではないかと考えられます。なお、熊蔵については別項の二神政幸理事執筆による「人物伝・二神熊蔵」を参照されたい。

【小才角二神氏略系図】



小才角二神氏家紋

丸に釘抜き



小才角二神氏の家紋は「丸に釘抜き」と云われる紋様ですが、釘抜き紋には約20種類があり、それらの中でも「丸に釘抜き」は代表的なものです。家紋はシンプルなものほど歴史が古いと云われています釘抜き紋の中では「丸に釘抜き」はシンプルな部類に属します。

紋章に用いられた釘抜きは、現在私たちが使っているはさみ形の釘抜きではなく、『和漢三歳図絵』工具の部に出ている万力と云われるものです。これは◇の形をした座金と一の形のテコからなりますが、今はこの万力は使用されないため、◇の形の座金が紋に用いられても、それが釘抜きの一部であることを人々は理解できません。この座金だけの紋は、釘抜き座金と云っていましたが、いつの間にか、釘抜き紋と略して云われるようになりました。釘抜き紋は九城を抜くと云われ、九つの城を落とすという戦勝の縁起で家紋にされたといわれます。これについては秀吉の小田原攻めの際の一柳直末の逸話が知られています。

釘抜き紋は、古くは『蒙古襲来絵詞』で、船の中に並べられた楯につけられています。また『鎌倉大草子』にはこの紋がついた旗が見えます。釘抜き紋は、形が単純で遠くからでもすぐに判るし、目出度い紋なので、多くの武将が用いました。清和源氏義光流の管沼氏、大給の松平氏、岡山の池田氏、そのほか清和源氏の依田、三好、大山、跡部などの諸氏。藤原秀郷流では、大矢、長谷川、西川などの諸氏。平氏良文流では長尾、三浦の両氏。橘流では曲直瀬、田中の両氏、ほか多数があります。(実業之日本社刊・家紋より)

小才角二神氏の代々が眠る墓地には多くの「丸に釘抜き」の家紋が見られますが、藩政時代の墓石には家紋が彫られた形跡が見られません。苗字、帯刀を許され、あれだけの業績を残した七代目熊蔵の墓石にも家紋は見当たりません。このことや他家の墓石の状況から考えると家紋を墓石に刻む風習が広がったのは近代になってからのことではないかと考えられます。小才角二神氏がいつの時代にこの家紋を採用したのかこれまでのところ明らかになっていませんが、今後の古文書調査の中で状況が明らかになる可能性も考えられ古文書調査の進展が期待されます。

いずれにしても小才角二神氏の墓地には他家の墓石よりも多く「丸に釘抜き」の家紋が小才角村全体を見渡すように列んでいます。

連載・二神氏と苗字の歴史 第5回

事務局長 二神英臣

前回は愛媛県松山市内を中心にして、藩政時代から明治初期にかけて住んでいたと見られる二神氏について紹介をしてきました。

今回は「小才角二神氏特集」に因み、小才角系譜の紹介をおこなうとともに、前回にお約束していた「二神氏」(二か)についてのこれまでの調査結果についてご報告したいと思います

小才角二神氏

小才角二神氏の名前が地元に残されている古文書などに登場するのは、天正18年3月「長宗我部検地帳」に初代九良衛門の名前が記録されているのを最初としています。天正10年から始められた太閤検地の土佐国版である長宗我部検地帳には小才角の項に「浜タノ上 一ノ拾代、出三十三代五分、下屋敷、小島民部大夫 給 九良衛門居」とあり小才角に九良衛門の屋敷があったことを地検帳が証明しています。しかし九良衛門には苗字がなくて二神氏であったのかどうかここで問題になります。

地検帳には苗字のある人物が登場し、杉村氏、依岡氏、小島氏などに混じって九良衛門が登場します。この時代、まだ苗字の使用は禁止されていませんでしたから九良衛門が苗字を名乗ろうと思えば名乗れたわけですがどうして長宗我部検地帳には九良衛門とだけ記されているのでしょうか。

そのわけは長宗我部検地帳に苗字を伴って登場する杉村氏、依岡氏、小島氏等はこの時代、幡多郷の代表的な国人領主的存在の系譜で庄屋職を勤めていました。土佐の国人でない九良衛門は、伊予国からやってきて間もない外様の身で、このとき土地の所有を認められるような存在でなかったと思われます。ようやく住み着いたのが小才角村(当時は小佐井津野村)で二神一族がやっと生活できる基盤を整えつつあった時代と見るのが実情ではなかったかと思われます。従って長宗我部検地帳の記述も九良衛門の土地を確認したものではなく、庄屋の小島民部大夫に給付した土地に九良衛門が住んでいる。と云う事実を述べているものです。

参考までに、二神氏が小才角村で庄屋として初めて登場するのは熊蔵の三男の三蔵がそれまでの小才角村庄屋川内氏から受け継いだのが最初でした。

九良衛門のこのような経過をたどって小才角二神氏の系譜は出発をします。二代目の八左衛門からは二神の苗字を名乗り、八左衛門は寛永8年から寛文3年まで33年間小才角村の老役を勤めます。この老役は三代目の喜平次、四代目金助、五代目金助、六代目金助と継続し七代目熊蔵のとき郷土職に就きました。

余談になりますが二神氏の宗家の人物には「種」の名前が多く使用されていますが、小才角二神氏の場合には「金助」の名前が藩政時代の中期に襲名されています。

小才角二神氏が小才角以外の地に系譜を上げたのは六代目金助の治世のときで、金助は天明元年より小才角村の老役を勤めていましたが天明8年家督を惣領の熊蔵に譲り2月16日、小才角村から北西へ二里半の所にある頭集、鉾土、平山、三か村の庄屋として頭集の庄屋として移っていったのが最初でした。その後、熊蔵の直ぐ下の弟、金助が頭集に別家を興し父、金助を助け庄屋代として任命されました。それ以降頭集の二神氏は明治維新まで代々、頭集、鉾土、平山、三か村の庄屋職を勤めてきました。

熊蔵が安永7年郷土職に出た後、小才角村の庄屋職は分家した三男の三蔵を就任させたり、次男の栄次は別家させて、小才角と頭集の中間地点にある周防形の庄屋職に就かせたりしていますが、これらはすべて熊蔵の政治力によるものであろうと考えられます。

いずれにしても初代九良衛門が小才角に住み着いてから熊蔵の時代までの約250年間で、小才角二神氏は幡多郷内でその存在を認められる安定的な位置を確保するに至ったと考えられます。

熊蔵の時代から今日まで約150年で小才角二神氏の系譜は大きく発展し、太平洋戦争後は関西圏を中心に全国展開を示し、特に高度成長期以後は関西地方では近隣の城辺二神氏系譜をはじめ、他の二神氏系譜とともに広がりを見せています。二神系譜研究会が旗揚げし、関西・中部支部が結成されて以降は次第に小才角二神氏の全国在住状況も明らかになりつつあります。昨年小才角で開催した学習交流会には40名を越える小才角二神氏系譜の方々が集まりました。今後の同系譜の交流と発展が期待されています。

二神熊蔵（武好）

理事 二神 政幸

1 小才角二神氏のおこり

熊蔵は、小才角二神氏宗家の初代九良衛門から数えて7代目にあたる。九良衛門の名は、秀吉の命を受けた長宗我部元親が秀吉の九州平定後の天正12年(1584)から天正18年(1590)にかけて実施された「長宗我部地検張」に出ている。



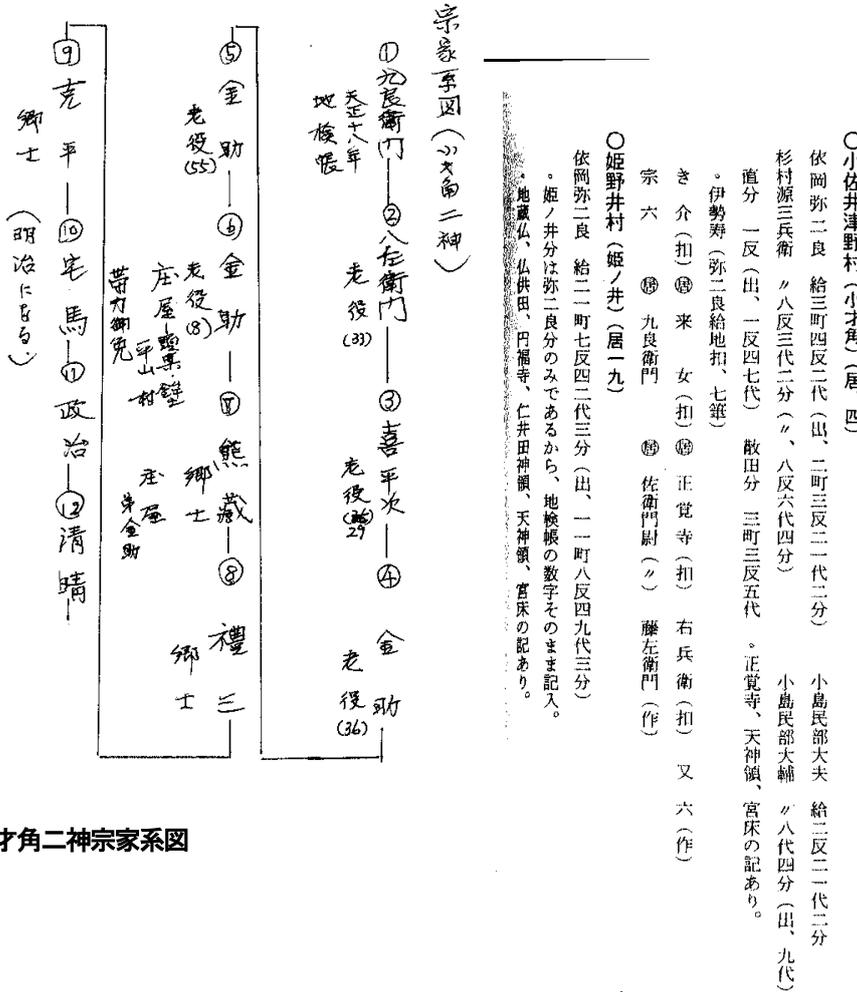
この地検帳によれば、大月町は天正17年(1589)12月10日の柏島村から天正18年3月29日の春遠村の地検で終わっている。

当時の小才角村は「小佐井津野村」と記述され「居四」とあるので、個数は僅か4戸しかなかったようである。この記述は天正18年頃、九良衛門が小才角村に居住していたことの証である。

小才角村は、才角村からの入植者などで増え、寛保3年(1743)の「寛保郷帳」には、「戸数56, 人口307, 馬36」とあるので、江戸時代の中期には大きく発展している。代々、村の老役を勤めてきた二神氏も村とともに栄えてきたことだろう。天正の頃、九良衛門が居を構えて400年余り、二神一族はこの僻地の地で僅かな土地と荒れる海を相手に、喜び悲しみを共に助け合いながら生き抜いてきたのである。過日の「小才角交流会」に参加した方々が、先祖の墓石の数の多さにずいぶん感動されたようであった。

大月町がまとめた資料に「二神九良衛門、本国予州、宝永四年事変之節、先祖書流出、是ヨリ以前代数統合不詳」とある。九良衛門はどこから来たのか？南予（南伊予）からではないか？豊後水道を南下して漂着したのではないか？戸次川の戦いに敗れた土佐の兵士と共に来たのではないか？等々、という推論

はいろいろあるが、実証に基づくものは何一つない。難しい問題ではあるが、いつか解決されることを願っている。(大月町史、二神栄氏の一族系図より)



小才角二神宗家系図

長曾我部地検帳より

2 熊蔵の生い立ち

熊蔵は、6代目宗家、金助とゑんの長男として明和2年(1765)に生まれている。幼名十太郎、後に良蔵。幼少の頃は、母方の姓上岡氏を唱え、文政5年(1822)9月に二神姓に戻している。それがなぜかは判らないが、父金助は天明8年(1788)老役を弟重吉に相続している。このことから熊蔵は母方の養子になっていたのではと思推される。また、同年、頭集・銚土・平山3カ所の庄屋を命ぜられ「帯刀御免」となっている。

熊蔵は小才角村庄屋。川内左平太の娘はまと結婚し男4人女1人の子どもを育てている。以上からも二神宗家が老役から庄屋へと隆盛の道を歩み出していることが判る。(二神家繫書より)

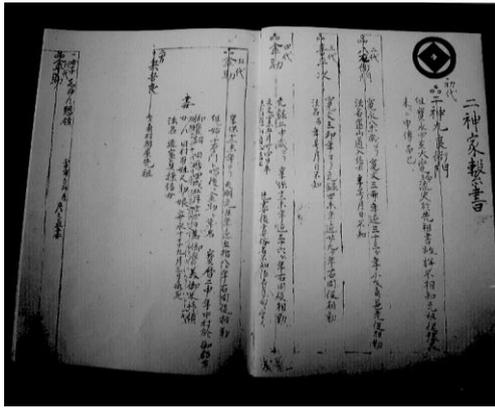
3 熊蔵の時代

父6代金助より庄屋を相続した熊蔵は、安永7年(1778)11月、蕨岡村田辺助右衛門より郷土職を譲受している。当時、土佐藩では郷土職が作られていて、他譲、譲受が行われた。藩の財政力の確保や非常事態の応急対策として、主として海防の任務に就いたようである。資料によれば、藩政時代に土佐の海岸に現れた外国船は19回にも及んでいる。

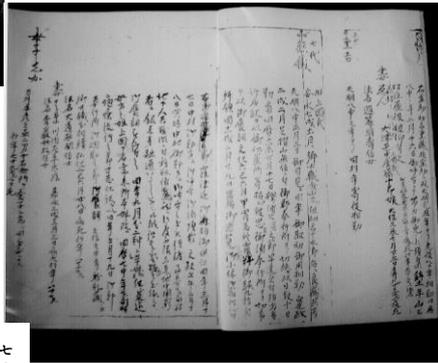
郷土の数は領内(土佐藩)で約800人。幡多郡では、明治6年(1873)提出の「幡多土族年譜」に80名の郷土名が見える。その中で、大月町関係分は弘見村の「大井田氏」、姫ノ井村の「森氏」そして、小才角村の「二神氏」となっていて、地下浪人(ジゲウニン)を除くと僅か3氏だけである。いかに下級武士とはいえ、郷土職というのは数少なかつたかが判る。また、郷土職は当時の価値が、米200石に相当したという。

郷土は、維新後は名目だけの「士族」となり、戦後の新しい時代まで続くのである。

二神宗家に伝わる唯一の古文書「二神家繫書」に熊蔵のことが詳しく記述されているのでご紹介することにします。



二神家緊書



七代 熊蔵
 安永七戌十一月御土職分二出少但幼名十太郎后二良蔵共号
 天明八申正月三日御目見工同年御取初御用相勤寛政
 二戌二月足摺山無住二付御奉行所ヨリ切紙ヲ以日数十日
 勤香同曆十一未四月十七日慥ノ浦大災之節早速大付（駆付け？）防
 行届取ヲ以御仕置所寄特二被思召御浦奉行ヨリ切紙
 ヲ以御渡御文化六巳六月甲寅為修履料御銀九拾目
 林領同十一戌二月廿九日御遊覧之節御小休御宿被仰付
 右御遊覧之節彦津道御殿御供仕同年三月十
 七日申村御郡方工御呼出之上被仰当番□才角村
 地下人共難欲二付禮初補達シ然此度不限□米地中困窮
 者工銀未等融通いたし遣シ候段彼是寄特之至依之□
 御渡御被仰付之年九月ヨリ二神卜平姓但シ是迄
 母方之姓上岡ヲ名兼来所本姓二改ム同曆七申年才角村
 庵番流行之節寸志仕取ヲ以同年五月十九日御郡
 奉行所御迎勤之節御渡御天保元申年伴礼蔵江
 御土職分相統弘化二巳六月廿八日病死行年八十一才
 法名大道無間信士
 主夫は主川内左平太徳嘉永三戌十二月三日病死行年八十才
 法名青蔵妙松信女

7代 熊蔵

4 熊蔵、その後

明和2年(1765)に生まれた熊蔵は、天保元年(1830)郷土職を長男禮蔵に相続した。熊蔵66才のときである。

熊蔵は、母ゑんの長寿の祝いを盛大に行っている。現在、宗家に残る古文書のほとんどがその祝いの時のものようである。その母は天保3年(1832)93才で世を去っている。宗家がお宝にしている熊蔵夫婦の絵図は、母の死から7年後の、天保10年(1839)熊蔵75才の時のものである。



熊蔵の墓



父金助の墓

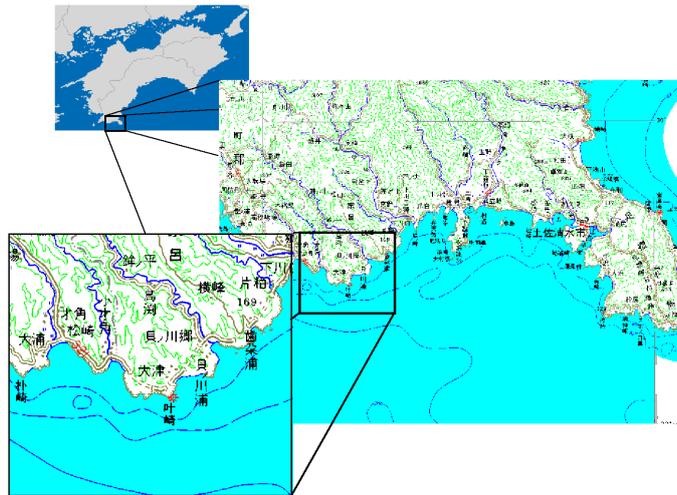
熊蔵は、郷土職は長男の禮蔵に、3カ村（頭集・鉾土・平山）の庄屋は弟の金助に、次男の英次には周防形村の庄屋を、3男三蔵には妻はまの実家から小才角村の庄屋を譲受させている。

熊蔵は、小才角村二神氏の宗家はもとより、一族の繁栄の礎を築いた「二神家中興の祖」ともいべき人物である。弘化2年(1845)熊蔵が81才で、妻はまは嘉永3年(1850)80才でこの世を去っている。まことに夫婦そろっての長寿であった。

5 おわりに

太平洋戦争が日一日と激しくなっていく頃、二神栄氏は家族を連れて小才角に帰り、医院を開業した。医師の傍ら村会議員などもやっていた。昭和27年(1952)「二神一族」の系譜の研究に入り、昭和30年にこれを完成している。私は、二神栄氏が各戸をまわって仏壇の調査などを続けている姿をよく知っている。南予（愛媛県の南部）や松山方面にも調査に出かけていたようである。私の父に話しに来たことも度々あった。

出来上がった系図は紙の筒に入れられて各戸に配られ、今でも一族の宝物として保存されている。紙面を借りてご報告申し上げ、改めて二神栄氏のご功績を讃えたいと思います。



小才角二神の先祖を求めて

理事 二神栄三

1. 九良衛門考

【海の民第2号】で、初代九良衛門は「関ヶ原の戦い」の後に小才角へ来たのではとの仮説を立てましたが、いま1つ、妄想だと一笑に付されるかもしれませんが、その後、気にかかっていた考えを述べてみます。

その前に当時の才角地方の勢力について記してみます。長宗我部元親の南予（伊予南部）方面当初の侵攻は、土佐西部の高岡・幡多二郡の兵力が主となったとあり、その中に「依岡氏」がいます。



依岡氏は「中村一条氏」を遡る土豪で、天正18年（1590）の【長宗我部地検帳】（以下、地検帳とします。）によれば、才角の枝郷小才角は地蔵寺を含め大部分が、同氏の給地が多くあります。それらの同帳記載の田畑には、「イノ谷」「カシ谷」「大バン」（同帳には濁点なし）など、今も同じ地名が残っています。

地検帳によれば、依岡一族は才角から柏島にかけて、多くの給地を持ち『古城略史』は、才角、柏島、他に同氏の持域を記しており、その在

地勢力が強かったことを伺い知ることができます。才角城跡は、同小学校の西の田を隔てた山の突き出しにあり、桜樹を植えた小公園となっています。

天正13年(1585)秀吉が四国を攻め、長宗我部元親は降伏し、河野通直は竹原へ。二神本家は所領を失います。

【以下】は「海の民ふたがみ第2号」の小才角初代の年齢(推定)を10年前後引き上げた、私の想像です。

「秀吉の四国攻め」「関ヶ原の戦い」とこだわりますのは、現在の処、九良衛門の出身を求める手がかりは、「家に伝わって来た落人説」以外に見あたらないからです。いづこの二神の流れであろうか。

2 地検帳にある九良衛門

3年ほど前、高知の図書館で、地検帳の小才角の項で『九良衛門』の名に出会ったとき、思わずはっとしました。残念ながら、その九良衛門には名字がなく、名だけでは同名異人の恐れがあると、さほど重くは考えませんでした。

しかし、【年代】について言えば、現在、思いを凝らしている地検帳を遡る5年前の、秀吉の四国攻めに当てはまると気にしながら、何か釈然としないまま、いたずらに月日を過ごしてきました。

今年に入って英臣事務局長と、小才角研究会の件で電話で話し合った翌日、なんの脈絡もなしに片足を落とし穴に踏み入れたままの自分に気づき、愕然としました。【これについては後述します】つきものが落ちた私は、地検帳の5年前の時代を考え、先祖に間違いないとほぼ確信できました。

歴史を追究する場合、作為や私見は厳に謹むべきことですが、相手は名のみで、何代もの先祖の頭を悩ませてきた難物「九良衛門」です。

以下は、史実に私見をないまぜて、述べてみます。

地検帳を遡る5年前の天正13年(1585)秀吉の四国攻め。二神通範(同一族)また河野方諸將の籠もる高穴城は、小早川隆景の猛攻に落城。

【私見A】 城兵は湯月城さして逃れたか、あるいは野に隠れた人々もあったことでしょう。史書には、この戦いに長宗我部元親は総力を挙げて、四国東部に集結したとあります。

【私見B】 土佐の西の端から全ての兵が、この方面に馳せ向かったとは考え難く、西部の守りもあり、寡勢ながら依岡、その他の兵の一部を四国西部に差し向けたとみるのは、私の考えすぎであろうか。

(1) 湯月城を小勢ながら援軍として入ったか、または、その後方に陣を敷いたのか。(わずかな兵の後詰めは考え難いが…)

(2) 或いは、もっと西の守りについていたのか。

やがて、湯月城は開城します。

【私見C】 前記、高穴城の攻防に二神の一人として九良衛門は加わっていたと考えて述べてみます。

高穴城落城。湯月城開城。身の処しかたに窮した九良衛門。この前後に依岡氏へ引き合わせを受け同勢の誰かを頼ったのか、それとも、それ以前に知辺がいたのか。いずれにせよ、同氏の勢力下の小才角に腰を下ろすについては、その庇護を受けたことは、間違いないのではと考えられます。

当時の小才角は、長年の戦乱に住民は減少、一部は空き家となり、田畑の荒れが目立つ状態であったことは、地検帳を見れば分かります。とすれば、双方ともほんの少しながらハッピーではなかったか。私は、2代目八左衛門から類推して、初代はまだ若かったと考えています。

【私見D】 前記に「後述」としてあります処を、述べてみます。

地検帳に名字は無く、単に九良衛門とあるのを、先祖としてみるには、物足りなさが無意識のうちに思考を曇らせていたようです。

よくその前後を考えてみれば、世に聞こえた武功があり、何人かを引き連れてきた来たというのであれば、ともかく、独りの若者が一農民として土着したのであって、百姓に名字を名乗る資格が、あるはずがないのです。この簡単明瞭なことに気づかなかったのは、長い間【我が先祖尊し】と、子どもじみた身びいきに陥っていたものと反省しております。

(2代目以降は公に、二神姓を名乗っていますが)、これについて、【末尾】に記します。

ことさら書くことではありませんが、ともすれば、【先祖を語る場合】美化し大きくみせたがるものです。自戒を込めて敢えて述べました。なんとか九良衛門に辿り着きました。では、元の二神は、となりますと、残念ながら、五里霧中、手も足も出ません。

それでは困る。格好が悪い。どこか、ぼやけたところに結びつけようと案が出るかもしれませんが、徳川時代と違います。そのようなやりかたは、心ある人の憫笑をかうものであり、ひいては、先祖を冒瀆することとなります。

無理なことはせず、分かるまでこのままでおくのも一つのあり方と私は考えています。(分かるまでといっても、その可能性は限りなく零に近い。)

以上は、いずれも私の見方であって、立場が変わればまた異なった意見もあるものと思います。その場合、背景となる時代、そして地形に留意していただきたいと思います。

小才角の浜について言えば、地検帳より90余年後の記録に(小才角に

浦郷あり)として、面積は約500坪余りとあるのが、現在、私の調べた一番古いものです。

〔前述の二神姓〕について、宝永4年(1707)の大地震、大津波に先祖書きを失いながら、2代目八左衛門から二神と名乗っているのは、士族年譜にも記載されており、次に例を挙げておきます。

【二神八左衛門小才角老役、寛永8年】。【関ヶ原の戦い】より31年後のことです。

【肖像画に残る熊蔵について】小才角二神の子孫の多くは、ともすれば同人一人が傑出していたかの如く伝えていますが、私の処は違っていました。

安永7年	5代金助老役	熊蔵郷士14才	(没年より算出)
8年	同上		
9年	同上		
天明1年	5代引退	6代金助老役	
2年	6代同上		
3年	同上		
4年	同上		
5年	同上		
6年	同上		
7年	同上		
8年	6第金助帯刀	御免、頭集	鋒土平山庄屋

上記の略年表のとおり、熊蔵が郷士になったのは若干14歳。祖父5代金助の時代であり、同人が南海の一隅に小さく花を咲かせ、僅かながら世に貢献できたのは、本人の資質もさることながら、先祖の影響が大きく左右していることは、お分かりと思います。些細なことです、正

確を期するのも、各先祖に対しての供養と書き添えました。
蛇足ですが、私のところでは、初代のことを「おお先祖さん」と呼んでいます。

3 連歌考

平成15年、二神系譜研究会総会での連歌の催しに備えて、「盲蛇におじず」(もはや死語であろうか)のたとえ通り、あれこれ想定して独り相撲で苦吟をしたり、いろいろな文献をあさっておりましたが、この催しは、諸般の事情により延期されました。

大三島の大山祇神社に、海賊衆の連歌が数多く残されているのは周知のことですが、「素人の手に負えるものではない」と諦めておりました。総会も終わり6月に入って、その海賊衆連歌の集大成ともいえる、既刊本の存在を知り、どうにか目にすることができました。同書に僅かに触れみた折りの、拙たない短歌を一首

矢叫びは 雲居のはたと 去りにしを
こだま残せし 瀬戸の浦波

瀬戸といえば、響きが柔らかく歌になりやすいと、…以下は、上記の独り相撲の際に気づき思いつくままに並べたものです。

「瀬戸の朝霧」 「瀬戸のさざ波」 「瀬戸の潮騒」
「瀬戸の浜風」 「瀬戸の島波」 「瀬戸の夕映え」

結びはご存じ、「瀬戸の花嫁」を……どうぞ。

シリーズ：「ふたがみ」にまつわる話し （その2）

二神（にかみ）氏について

会長 二神 浩三

「二神」の読み方については、我々、二神系譜研究会の会員ならば迷うことなく「ふたがみ」と読みますが、松山市内には「にかみ」と呼ぶ家系のあることが分かっています。同族であるのか否かについては調査をしてみたいと思っていました。また、総会の席で会員さんからの質問を受け、より強く調査の必要性を痛感していました。

そのような時、全く偶然に「にかみ」さんとの出会いがありました。「海の民ふたがみ」第5号にお詫びと訂正として河東碧梧桐の墓石の事をご報告しましたが、第3号11頁に掲載していた松山市鷺谷墓地に佇む碧梧桐の石碑が、伊佐爾波如矢（いさにわ ゆきや）氏のものであることをご指摘いただいた方が、二神将（にかみ すすむ）さんでした。早速、「にかみ」氏の出自についてお尋ねしたところ、「二神鷺泉（にかみ ろせん）と道後湯之町」（著者：二神将、発行所：松山子規会、発売元：アトラス出版）という立派な著書の寄贈を受けました。

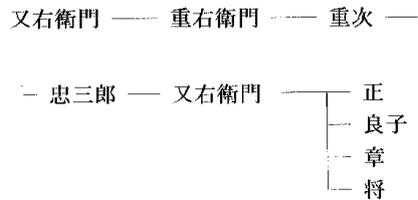
更に手紙には「…先祖の残した記録には、それらしいものは何もありませんが、案外、河野氏滅亡後、帰農して道後湯之町に住んだのかもしれませんが。まだまだ解明しなければならぬ点も多くあります。このような状態なので由緒正しい二神会に入会するのを決めかねております。…」とありました。

その書物の19頁に、松山百店（79号）の野口光敏氏の「玉石堂博物館」が引用されていました。明治期の道後俳壇で活躍した『温里園二神（にかみ）鷺泉の俳句』という表題で、「鷺泉は湯之町の宿屋にかみ屋の主人で、二神重次というのが本名」とありましたが、その出自についての記述はありませんでした。

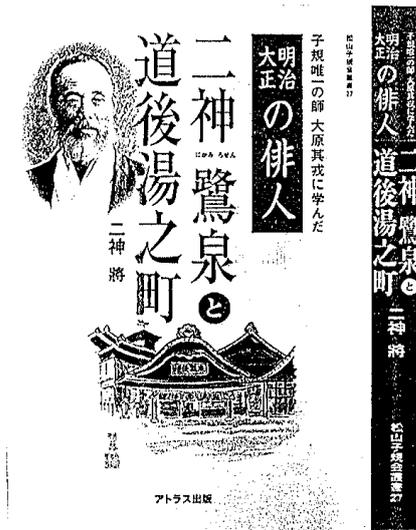
道後温泉本館の南に冠山と称する丘があり、そこには大国主命・少彦名命を祭っている湯神社があります。これは式内社であり、当時、道後の人々は親しみを籠めて「ニカミサン」「ニカミサン」と呼んでいましたが、「二神（にかみ）

氏とは何の関係も無かった」と二神（にかみ）将さんのお話でした。【式内社とは延喜5年（905）に全国各地で祀られていた神社を調査し、藤原時平・忠平兄弟が編集した『延喜式』に登録された神社を「延喜式内社」と呼び、道後湯之町には式内社の国幣小社として湯神社、出雲岡神社、伊佐爾波神社の三社があった。】

なお、二神（にかみ）家系図はさきの著書から見ると、次のように示される。



重次（鷺泉）は、弘化4年(1847)に重右衛門の次男として生まれている。過去帳では安永7年(1778)二神（にかみ）又右衛門が童女の葬儀を行った記録があるとのことである。



また、二神（にかみ）家の家紋は「丸に違い鷹の羽」とのことであり、二神（ふたがみ）家にはまだ見出されていない家紋である。二神（にかみ）家の墓は、一遍上人誕生の地「宝巖寺(松山市道後)」にある。

以上のことから、二神（にかみ）家と二神（ふたがみ）家とが同族である可能性は小さいものと推量される。

シリーズ：「ふたがみ」にまつわる話し （その3）

むかしばなし「二神島と菅原道真」

常任理事 豊田 渉

(京都調で読んでみておくれやす・・・)

菅原道真さんの話は、皆さんもよう知っておいですやろ。学問の神様と崇められておりますわな。

皆さんは、雷が鳴ったとき頭を抱えて「くわばら、くわばら」と言いながら逃げますやろ。あれは何でか知ってはりますか？

道真さんは大変頭の良いお人で、都でも一番高い位についておった人やけど、何かで帝のお怒りにふれて、九州の太宰府に流されてしもた。

ほいでも、昔の学問のあるお人は、流されていった先でもかなり大事にされて、不自由とか、そんなにひどい目えにはおうてへんのえ。太宰府に「道真さん」をお祀りした天満宮が建立され、奉られているのがその証拠どすえ。それにあやかろうとして、日本各地に「道真さん」をお祀りしているお宮さんがあるやないか、なあ。

そんなに地元の人々に慕われても、道真さんは「東風ふかば におい起こせよ梅の花」などと、いつまでも都を偲んだ歌を残してますなあ。都に住むことが、道真さんにとって全ての象徴やったんやろか。

こんな話があるえ。道真さんが、都で住んではった所は、「桑原」という地名やったそうや。あの有名な歌に詠まれた梅の木も、ここに植えられていたと言いますわな。

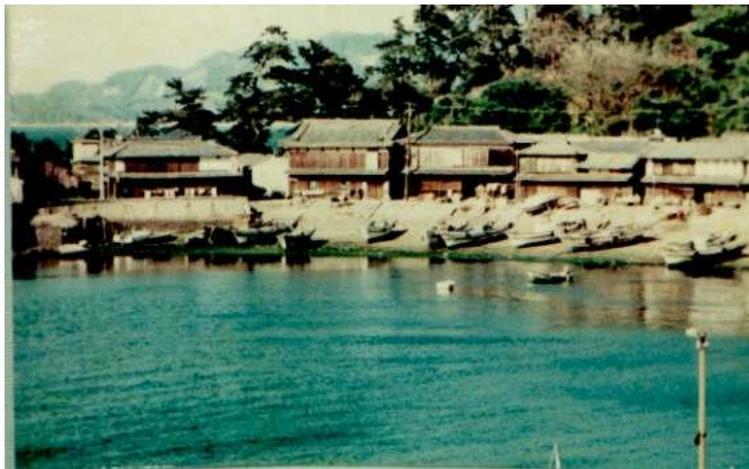
九州に流された道真さんは、都を恋しがるあまり、都に雷が落ちて人々が皆死んでしもたらええという、物騒な願掛けをしよったということや。それでも自分が住んでおった「桑原」のお人たちには、その被害がおよばぬようにと、えらい虫のええ願掛けやったらしいのや。そやから、そののちこの話を聞いた

人は、雷がドーン！と鳴り出すと、「くわばら、くわばら」と言うて、自分のところへは雷が落ちんようにとお願いしながら、走って帰るんや。

やがて道真さんは、都へ帰ることを許されはったけど、その頃は都から九州までは遠おますわな。都落ちのときも、都へ帰らるときも、山道を歩き、船に乗って何ヶ月かかりはったのやろ。

二神島にも、風よけですやろやけど道真さんが途中寄り道されたんやないかと思われることが、ちょっとだけおますんや。二神島の宮司さんは昔から「桑原」というお人やったそうやし、何や、お宮さんも全国で3軒という由緒あるお宮さんらしいのやけど、それについてはわからんのどす。それに「天満宮」やのうて「宇佐八幡宮」やしな。これは単に私のこじつけにすぎんのや。無責任な話でっしゃろかなあ。もうちいと調べてみたらええかもしれまへんなあ。ほいでも、話としては面白おすやろ。ほなまた。

(聞き取り 二神島 杉山邦子)



シリーズ：「ふたがみ」にまつわる話し (その4) むかしばなし「魚屋七兵衛の話」

常任理事 豊田 渉

その昔、二神島の「しょうのし」（註：魚の仲買人）の七兵衛は、庄屋になりとうてしようがなかった。皆から買い上げた魚は大坂まで運んで、何倍もの値段で売れよったもんじゃけ、島一番の「ぐべんしゃ」（註：お金持ち）じゃった。

二神島は、鎌倉の時代から代々二神氏が島を治めてきたが、七兵衛は心秘かに「わしのほうが金持ちじゃし、頭もええわい」と思っていたらしい。どうにかできんものかと知恵を巡らし、松山のお殿様に貢ぎ物をして、「どうか、私を庄屋にしてください」と頼み込んだという。

お殿様は、大きな鯛やたくさんの小判をもらうのは嬉しいが、さりとて何ら咎めるだてのない人間を無理矢理追い出すことはできん。のらりくらりと返事を延ばしておった。

何度も何度も松山へ貢ぎ物を持っていった七兵衛は、とうとう皆の納める年貢の金にまで手を出してしまい、ある時その使い込みがバレてしまった。怒った島人たちは七兵衛に「お前の持っている山や畑を全部差し出せ」と迫って承知させた。

皆は自分が払ったはずの年貢（税金）の金額に合わせて、鍬の柄で畑の広さを平等に計り、それぞれに分配した。その土地は「仕配地」と言

われ、その後売買もされたが、今でも鍬の柄で計れる畑があるそう。人間、欲を出すところはないのう。まだ、庶民は苗字などは持てん時代やったけ、魚の仲買人だった七兵衛は「魚屋（うおや）」という屋号でよばれておったが、宇佐八幡神社に「寛政四子年 献主 魚屋七兵衛」と刻まれた、立派な一对の石灯籠がある。島で一番羽振りが良かった頃に建てたんじゃろうか。

全財産をなくした七兵衛は、失意のうちに島でその一生を終えたということじゃ。

(聞き取り 二神島 杉山邦子)



二神島上空より

会員さんからの便り

一つの人生訓

愛知県日進市 二神 弘



松山市鷺谷墓地にて 奥様と

茫々八〇有余年の人生を回顧するとき、忘れることのできないいくつかの私の人生訓の中から、その一つを紹介したい。

私は1962年から64年の間、アメリカ東部の大学（大学院博士課程）に留学する体験を持った。留学して間もない頃の出来事である。私は週一度、指導教授（アドバイザープロフェッサー）の研究室に行き教授から直接、いろいろ指導を仰ぐことにしていた。

それは教授の担当する講義を聴いていたので、その講義に関する質問事項を解明してもらうこととアメリカ留学生活の中で直面する種々の日常的問題について、教授からアドバイスを受けるためであった。

この日はちょうど、教授は大きな実験台の上の水槽に水を入れ、実験

用具を整置し水理実験の準備中であつた。私はいつものように教授と向き合つていすに腰掛け、教授の担当している講義について二、三質問をしていた。ちょうど、そのとき卓上の電話が鳴つた。教授は電話器を取り上げ二言、三言しゃべっていたが、私に向かつて「ヒロム（私たちはお互いにファーストネームでヒロム、ピラスと呼び合つていた）、これからちょっと、学部長の部屋へ行って来る」そして実験台の上の、まだ少ししか水の溜まっていな水槽を指して「水槽の水がほぼいっぱいになったら水道の栓を止めてくれ」と言つて研究室を出て行つた。私はまだ留学早々で言葉のほう弱かつたので、教授が学部長室に行つている間に、講義の質問事項や生活指導事項について単語やフレーズ、そして文章構成などについて丹念に吟味を重ねていた。

四、五分も過ぎた頃であらうか。ザァザァという水の落ちる音にびっくりして実験台を見ると、水槽はすでに満水して実験台から水が床下に溢れ落ちてゐるではないか。「あつ、しまった」と私は直ちに水道の栓を止めると同時に、室の隅にあつた雑巾で水を吸い取り床を拭き始めた。水道からの水は蛇口に付けられたゴムホースによつて水槽の中に注水されてゐたから、音が全くしなかつたのは当然である。そこへ教授が帰つてきた。

教授は研究室のドアを開けるなり、床下に溢れた水を拭いてゐる私を見て大きな声で「What happened! (何が起つたんだ)」と叫んだ。このときの教授の大きな声は今でも私の耳底にこびりつてゐる。教授は足早に研究室に入るや、実験台の下の観音開き戸を、さつと開けて中を見た。私はあつと驚いた。実験台の下の棚の上に置かれてゐる実験用の機械器具、参考図書、文献類そして教授が今まで実験してきた数多くの実験記録、資料データ綴りなどが溢れた水で、しとどに濡れてゐるではないか。しかも実験記録、資料データ綴りに書かれたインクの文字や数字が溢れた水で溶けてぼやけしまつてゐるではないか。そ

の惨憺たる情景を見た教授は、両手を実験台の縁について斜めにした体を支えるような姿勢のまま、一言も声を出さない。教授の肩が小刻みに震えていた。おそらく教授は心中の大きな失望落胆、強い怒り、深い後悔などの感情の高ぶりを、じっと押さえて耐えていたのであろう。私は深い後悔の念と教授の激しい叱声を覚悟して、ただ黙して佇立するのみであった。しばらくして教授は顔を上げて、私を見つめて静かに言った。「私が不注意であった。私が蛇口からの水は、ゴムホースを付けているため、音がしないから注意するようにと、言わなかった私が悪かった」。そして最後に、つぶやくように「私が悪かった」。

その一言を聞いたとき、私は全身全霊が烈しい後悔と反省と申し訳なさで凍りついたように固く締まり、ただ首を垂れて「済みませんでした」と謝るのみであった。

もしこの時、教授が「ヒロム、もっと注意しなきゃだめじゃないか」とか、「これからはもっと、もっと気をつけるんだね」などと半ば非難し叱責でもしたならば、当時は私も若かったから、おそらく直ちに「私も確かに不注意だったが、君も蛇口の水はゴムホースが付いているので、注水していても音がしないから注意するようにと一言、言ってくれてもよかったんじゃないか」と売り言葉に買い言葉で反論したかもしれなかったであろう。しかし事實は、それとまったくの正反対のピアスのたった一言「私が悪かった」であった。

顧みて、何かトラブルが発生すると「君が悪い」「おまえが悪い」「先生が悪い」「大学が悪い」「社会が悪い」「政府が悪い」「国が悪い」などと常に相手を責め詰り非難する声は大きく叫ばれるけれども、「私が悪かった」「私が不注意であった」「私の努力が足りなかった」「わたしの状況判断が間違っていた」と自らを厳しく反省し批判し自戒する声は弱く小さく、時には全く聞こえないという、自らには大甘に甘く、相手には大

辛に辛く厳しく責めるといふ戦後日本の小児病的、独善的、エゴイズムの社会情勢の中で長く生活してきた私にとって、「私の注意が足りなかった」「私が悪かった」と言っただけで自らに厳しく反省している教授を見て、私は鞭打たれる思いで反省し自戒し身を固くして佇立していた。つまり彼は優秀な学者、研究者であると同時に、また卓越した教育者でもあったのである。そして私は自らの不注意を深く反省し後悔すると同時に、教授を心から信頼し尊敬する気持ちが満ちあふれてくるのを覚えた。

帰国してからすでに三十有余年の歳月が流れたが、私達の厚い交友関係は継続している。ピアスから十数年前に来た手紙に「ヒロム、今度全米学会の会長に選ばれたよ」とあって、私は大いに驚き喜ぶと同時に、全米学会の会長に選任されたことこそ、まさに彼の学問人としての最高、最大の評価、証明ではないかと思ひ、心から彼のために喜悦した。実力主義、能力主義、厳しい競争社会の移民大国アメリカにおいて、その所属する学会の頂点に立つことが、いかに至難の業であるかは、甘いママア主義、縁故主義、前例墨守主義、学閥主義の強いどこかの国では到底、想像もつかない厳しい人事、人間選択なのである。私の貴重な人生訓の一つである「自らに厳しくあれ」を身をもって教えてくれたピアスは、国境を越えて私の永遠の親友である。

1999年3月29日

(続・地理学を学ぶ 古今書院 1999年3月より転載)

会員さんからの便り

ルーツ

横浜市 二神 和子



はじめて松山市にある祖先の墓参りをしてから1年余りが過ぎました。

私の夫は満洲からの引揚者で、引揚げの途中両親や妹を亡くし、兄弟4人で引揚げてきたため、祖先の墓を弟が探し当てたのは、数年前のことでした。そして昨年（平成14年）4月、兄弟夫婦での墓

参りがやっと実現しました。そ

ご主人照夫さんと江田島にて

のお墓は、道後温泉のそばにある円満寺というお寺にありました。大変親切な尼僧のおかげでお墓は守られていました。兄弟夫婦ではじめて祖先の墓参りが出来たのは、仏縁と申しましょうか、感無量のものがありました。

これを機会に亡き長兄の残した記録により、我が二神家のルーツをたどってみたいと思います。

「二神家の遠祖は、天孫降臨より早く本土にくだった饒速日命にぎはやひのみことの裔と言われる物部氏である。饒速日命は本土へくだった後、大和国を統治する豪族長髓彦ながすねひこを扶けていたが、神武天皇のご東征にあたり、天孫降臨民族の一人であった饒速日命は、長髓彦に帰順を奨めたが、応じなかったのをこれを征伐し、神武天皇に

帰順した。その忠義心と勇武が買われ、天皇の禁衛隊に付けられ物部氏と名乗ることになった。

奈良朝の頃大和朝廷の全国統一が堅固になると共に、設けられた四道将軍の一人として西海道(四国)を治めるため四国に派遣され土着した一族が私たちの祖先であり、その後、姓を越智と名乗り、その子孫は四国のみならず、九州・中国地方にも分布している。鎌倉時代の元寇に際し、西方の国防のため全国から防衛が集められたとき、祖先も駆りだされ一族に属する河野通有が活躍した話がある。河野氏は、越智氏より分れた一族である。また、一族の者の名前には必ず「通」の一字を付ける慣わしとなっていると聞いている。因みに我が家は、自分の祖父に当たる「正近」が越智氏から分家して、二神の初代となったのである。祖父の兄は越智通政を名乗っていた。私たちの近祖は、明治維新まで松山藩の藩士として、また、剣術指南役を務める家であったそうである。

二神の姓に変わった経緯は、越智から二神へ養子縁組をした結果である。改姓の目的は、明治維新後の兵制改革による徴兵制度で鎮台兵士に徴募されることを嫌ったことによるものだそうである。武士だった者が将校ならともかく兵隊として徴集されることを好まなかったのである。国民皆兵制の創設当初は家族制度の維持を重視する政策の現れで、家督を相続すべき長男は徴兵免除という恩典を与えられていたことから、祖父は養子縁組をしたようである。」

以上が、亡き長兄の残した二神のルーツです。送っていただいた「海の民ふたがみ」を拝見しますと、「河野」「通」などの文字が見え、我が祖先との共通点を感じます。縁を大切に生きたいと思う今日この頃です。

会員さんからの便り

二神島を訪ねて

青森県 二神 利絵 (弘前大学医学部在学)



高浜港 これより二神島・中島町吉木へ

来年は5年生だし、最後の旅行になるかもしれない。だから、リゾートよりももっと濃い旅がしたい！！そう思って春休みを過ごしていた頃、夜通しのインターネット世界のたびで、たまたま同姓同名の方を見つけ、その方とのメールの中で、前から話には聞いていた二神島の話が出てきたのです。

そこで検索を進め、二神のホームページに出会いました。そしてメールをしてみると、なんと一通目の返信で、「来るなら案内しましょう」と言う有り難い御返事。あれよあれよと言う間に一週間後の出発となったわけです。

松山市、北条市、二神島と巡ってみて。曖昧でぼんやりと、そりゃあ居るだろ、と思う程度だった先祖や親戚の存在が明確になり、思ったこ

と。それは、自分は「生きていかなければならない」と言う事でした。当たり前のことですよ、でもそう感じました。

私の DNA には静かなるメッセージが莫大な量刻まれていて、それを背負って前を向いていかなければならない、と。私が生きている事を、生きているだけで喜んでくれているだろう人が、もうたくさん居る、と。

でもそれはプレッシャーではなく、つらい時にも悲しい時にも、頑張れる応援であり、頑張り過ぎない勇気になりました。命って、生きるって本当に不思議だなあと思いました。そして今自分が、命と大きく関わる仕事につこうとしていることを、本当に嬉しく思いました。今回のたびで得たものは大きく、大切なものばかりでした。

旅にあたって多くの御支援を頂きました、二神浩三さん、二神英臣さん、二神重則さん、豊田渉さんには感謝の気持ちで一杯です。



左より 英臣事務局長 浩三会長 利絵さん 重則理事

そして心配しながらも旅に出してくれた両親にもお礼を言いたいです。本当にありがとうございました。

最後に。旅で撮りました写真を作品として学校の定期写真展に出展いたしました。この度、二神島の方に飾って頂けるそうで、豊田さんに郵送する事になりました。皆様、機会が御座いましたらごらん下さい。

役員のつびやき☆☆☆

フーガの戯れ

ふたがみ・・・ふたかみ・・・にかみ・・・にがみ・・・みかみ・・・みがみ・・・・・・
二神・・・二上・・・ニッ神・・・仁神・・・仁上・・・仁紙・・・・・・

常任理事 二神 重則

会報4号の間違いを知らせて頂いた方は二神さん、「にかみ」さんです。「道後湯築城を守る県民の会」の集まりの中で知り合いました。思い起こせば97年頃に「二神のホームページ」を作るきっかけだったのも、この会に出席しての事でした。

その97年に二神（ふたがみ、以下断らない限り読みは“ふたがみ”にします）さんの全国分布を調べたいと思い、NTTの番号検索（現在のエンジェルネット）で二神さんリストを作りました。その折りの検索はひらがなで“ふたがみ”です。

バリエーションは二上さんから仁神、仁上、仁紙さんとありました。

そのリストに沿って冊子「二神さんあつまれ」をお送りしました。

この夏、図書館で東京23区の電話帳を見ていましたら、二上さんが6軒の後に二神さんが3軒、それに続いて二上さんが11軒、そしてまた二神さんが18軒とありました。そうなんですね、始めの9軒の方は“ふたかみ”さんで、後の29軒が“ふたがみ”さんと、読みによって分かれていると思われました。

さてはと思い“にかみ”さんと“にがみ”さんを探しましたところ、該当の処に二上さんが7軒有りました。この場合続いているので“にかみ”さんか“にがみ”さんか、どちらで読むのが正しいか分かりません。

昨年、青森の方からメールをもらいました。ニッ神（ふたつかみ）さんと言われていました。ニッ神さんは東京23区に2軒有りました。

先日、九州の黒川温泉で問題が起きました、その折りにTVのインタビューに答えて居られた方の名前を見たら「神さん」なんですね。何と読むのでしょうか？“かみ”さんでしょうね。

「アクセントを変えたら家内になるが・・・フムフム・・・」

「二」の読みは “に”、“じ”、“ふた”

「神」の読みは “しん”、“じん”、“かみ”、“がみ”、“かん”、“こう”

「二」と「神」の読みの組み合わせは18通にもなります。その上それぞれの読みに対する漢字がありまして・・・。

ますますこんがらがってきた。

松山市でも時折「三神」さんの看板を見かけます。“みかみ”さんか“みがみ”さんなのでしょう。案の定、東京の電話帳でも大阪の電話帳でも「三上」さんの後に「三神」さん、その後に「三上」さんと「三神」さんが続きました。

ここも同じように“かみ”、“がみ”となっているのでしょう。

しかしこの「三上」「三神」グループは東京23区でも、大阪市でも多数を占めています。余り多いので何軒有るのか数えるのをあきらめました。

最初に書きました様に調べたのは“ふたがみ”さんです、“ふたかみ”さんは私共の持っている「二神」リストに出ていません。それと共に電話が事業者の登録になっている方もリストから漏れています。

あれから7年経ちました、電話も携帯が多くなり、名前を表示しない人が増えました、来年辺りが電話番号から調べるリスト作りの最後の機会かも知れません・・・・・・・・

ワーグナーの「ニーベルングの指輪」をみました。最初は「es wer einmal (昔々あるところに)」で始まり、楽劇の最終章は「神々の黄昏」です。昔々あるところで“かみ”が“がみ”になったのかそれとも逆か・・・

その様な事を思いながら聴きました。